

可能表現変遷に関する一検証

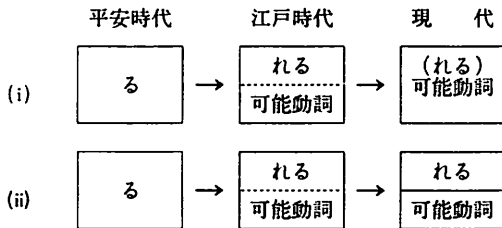
——現代東京の高校生の調査より——

中 田 敏 夫

1. はじめに

可能動詞と呼ばれているもの(「読める、書ける」)は、室町から江戸にかけての時期に成立・発展してきたようだが(注1)、その発達とともに、既に存在していた「れる」で表される可能(「読まれる、書かれる」)と併存することになり、さらには「れる」を凌駕し、例えば現代東京語では「れる」はほとんど姿を消す結果となる(注2)。ところが、方言によっては可能動詞による可能表現と「れる」によるそれとに意味上の違いが認められ、可能表現の枠を分けあっている地域がある。例えば、青森県では動詞未然形+(ラ)エネエ(られない)は「その場の条件による不可能」、いわゆる可能動詞未然形+ネエは「無能力による不可能」という違いがみられる(注3)。

四段動詞に関する可能表現の変遷を単純に示せば、



の二通りが考えられ、東京は(i)の経過を、青森は(ii)の経過を辿ったといえる。可能動詞の発生によって、東京では「れる」の消失を起こしかけているのに対し、青森では両者が用法を分担しあう形で落ちついたわけである。

ところで、B. H. チェンバレンが“A Handbook of Colloquial Japanese”(1888, 明治21年初版刊)で可能表現に関して次の興味ある事実を指摘していることはよく知られているところである(注4)。

Thus ikemasu means “one can go” (because the way is easy, or because one is a good walker). Ikaremasu means “one can go” (because there is no prohibition against so doing). (p. 201)

そして、所謂可能動詞で表される可能表現は physical

ability を表し、may より can に近く、助動詞「れる」によるものは moral ability を表し、can より may に近いとしている。チェンバレンが観察した言語が標準的な the dialect of Tokyo (p. 9) だったとすれば、この指摘は、実際には

It is true that two forms are sometimes confounded. (p. 202)

という状況にせよ、東京においても前述の(ii)の経過をたどる可能性があったことを示唆する。

さて、現代東京語においてすすんでいるといわれている一段動詞における「られる」型(「起きられる」)から「レル」型(「起きれる」)への変化に関しては、従来音節数及び音環境の観点から要因が探られてきており、最近のものに、岡崎和夫氏「『見レル』『食べレル』型の可能表現について——現代東京の中学生・高校生について行った一つの調査から——」(『言語生活』NO. 340 1980. 4)がある。これは400からのサンプル数より、「レル」型の用いられやすさには音節数と音環境が深く関わっていることを裏付けたものである。確かにこれらの要因が大きな傾向として認められるのだが、細かくみると、同じ音節数、活用の段であっても、例えば、411名中、「投げられる」のみを用いる者が148名に対し、「受けられる」のみを用いる者は277名、一方、「投げれる」としかいわない者が64名なのに対し、「受けれる」のみは31名というように、かなりの差が認められる。nag-(eru) と uk-(eru) という音環境の違いに特に有意性は認められない。そこで、「レル」型の用いられやすさに関して、文脈の意味の差、可能表現としての表現上の違いというものとの関与を考えてみてはどうだろうか。つまり、四段動詞で、「れる」と可能動詞がほぼ拮抗していた(であろう)明治期東京語について physical ability と moral ability の別がチェンバレンの指摘にあったように、一段動詞でも、「られる」と「レル」が拮抗しつつある現代東京語において、意味的な差が内在した傾向として認められはしないだろうか、と考えるわけである。

本稿は、現代東京語の一段動詞における「られる」

型から「レル」型への変化に関して、上記のような意味的側面が働いているか否かの検証を第一の目的とする。あわせて四段動詞について可能動詞化はどの程度徹底されているかについても確認したい。

なお、「書かれる」のように助動詞「れる」のついた形を「れる」型、「書ける」を可能動詞、「起きられる」のように助動詞「られる」がついた形を「られる」型、「起きれる」のように一段動詞に「れる」がついた形を「レル」型と便宜上呼びわけることにする。

2. 調査の概要

〔調査地、被調査者及び調査日〕

東京都立深沢高校（世田谷区）1、2年生190名
〈男・女〉 昭和55年9月

被調査者は都内出身者に限った。

「られる」と「レル」、「れる」と可能動詞の使い分けは意味的な特徴のもとに截然と分かれるものではなく、あるとすれば傾向として認められる性質のものであることが予想されたので、相当数のサンプルを集める必要があった。この点からまとまった数量が得られる学生が調査対象に選ばれたわけである。また、変化の要因を考察するためには「られる」から「レル」への変化のまさに最中である青年層の状況が適当と考えられた。

〔調査の方法〕

〔文例〕

- 1・a 私は100メートルぐらいなら泳げる。
b 泳がれる。
- 2・a この服は小さくなっちゃってもう着れない。
b 着られない
- 3・a 学校のグラウンドは生徒しか走れないことになっている。
b 走られない
- 4・a この子は1人でもうちゃんと寝れる。
b 寝られる。
- 5・a この字は小さすぎて虫めがねがなければ読めない。
b 読まれない。
- 6・a この子はまだ小さすぎて1人では高い階段は降りれない。
b 降りられない。

調査は教室内で、あらかじめ用意した質問用紙に各自で回答を記入してもらう方法を採用した。調査文には次に述べる可能表現の枠組(I), (II), (III)の違いをよく反映させたものを作成し、「られる」のついた形と「レル」のついた形(26文)、「れる」のついた形と可能動詞(18文)をそれぞれ選択させる選択肢式を採用した。(注5)

〔調査文〕

形式上の相違が意味上の使い分けを反映しているか否かを検証するためには可能表現を意味・用法の上から分類しておく必要がある。この分類基準については拙稿「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」(『都大論究』18号 昭56)を参照していただきたい。

「能力可能」がチェンバレンの physical ability, 「受容・許容可能」が moral ability にほぼ相当する。

- (I) 能力可能……ある動作が動作主体の能力・意志によって実現されることを表した表現。
(例)弟は水泳が得意で何メートルでも泳げる。
- (II) 受容可能……動作の対象である事物の具備する性質・状態について表された表現。
(例)この川は汚なくて泳げない。
- (III) 許容可能……ある動作が外的条件のもと、許容されることを表す表現。
(例)このプールは会員しか泳げないことになっている。

- 7・a 成人映画は18才未満は見れない。
b 見られない。
- 8・a 私は英語は全然話せない。
b 話されない。
- 9・a 私は恥ずかしがりやで人前に出れない。
b 出られない。
- 10・a もう胃は直ったんだけど、医者の命令でまだ自由には食べれない。
b 食べられない。
- 11・a 私はソフトボールだったら50メートルは投げれる。
b 投げられる。
- 12・a 夜の墓場でもどこでも私は臆病じゃないから1人で行ける。
b 行かれる。
- 13・a その荷物、私ならちゃんとたなにのせれる。
b のせられる。
- 14・a 夜道はこわくて1人では帰れない。
b 帰られない。
- 15・a この子はもう1人でちゃんと電話をかけれる。
b かけられる。
- 16・a 私はサッカーがうまいから遠くまでボールをけれる。
b けられる。
- 17・a 君は規則でクラブへ入れれない。
b 入れられない。
- 18・a ヘビースモーカー（煙草をたくさん吸う人）は一日50本でも60本でも吸えるらしい。
b 吸われるらしい。
- 19・a このベットは子供でも十分寝れる。
b 寝られる。
- 20・a 1日中雨で、今日のグラウンドは走れなかった。
b 走られなかった。
- 21・a 生徒はこの階段を使って下には降りれないことになっている。
b 降りられない

- 22・ a 私は簡単な英語だったら話せる。
b 話される。
- 23・ a この子はまだ1人で服が着れない。
b 着られない。
- 24・ a 今日の試験に出た漢字、むずかしくて全然読めなかった。
b 読まれなかった。
- 25・ a 目がいたくてこれ以上テレビを見れない。
b 見られない。
- 26・ a このリンゴは腐^{くさ}っているから食べれない。
b 食べられない。
- 27・ a これは公営プールだからだれでも自由に泳げる。
b 泳がれる。
- 28・ a 今日のクラブは用事がある出れない。
b 出られない。
- 29・ a このたなは丈夫だからいくらでものせれる。
b のせられる。
- 30・ a 放課後までは勝手に帰れないことになっている。
b 帰られない
- 31・ a このコップは普通のコップの半分の量しか入れれない。
b 入れられない。
- 32・ a 法律では20才になってはじめて煙草も吸えるようになる。
b 吸われるようになる。
- 33・ a 8時以降は長距離電話は半額でかけれる。
b かけられる。
- 34・ a 私は100メートル、12秒じゃ走れない。
b 走られない。
- 35・ a 日曜日は学校がないからお昼まで寝れる。
b 寝られる。
- 36・ a ルールでは(野球の)けん制球は何球でも投げれる。
b 投げられる。

- 37・a 口どめされていてこの秘密はだれにも話せない。
b 話されない。
- 38・a この階段はよく知っているから目をつぶっていても降りれる。
b 降りられる。
- 39・a 戦時中は外国の本は禁止されていて、自由に読めなかった。
b 読まれなかった。
- 40・a 私の友達の高校は制服以外の服は着れない。
b 着られない。
- 41・a この川は汚なくて泳げたものじゃない。
b 泳がれた
- 42・a この子はまだ赤ちゃんで1人では食べれない。
b 食べられない。
- 43・a 私は口の中へ火のついたマッチなんか入れれない。
b 入れられない。
- 44・a その荷物、私ならちゃんとたなにのせれる。
b のせられる。

〔記入方法〕

方法は岡崎氏前掲論文に全面的にしたがった。文例にかかげた各組（a・bで一組、全44組）について、気のおけない知人・友人たちなどとのふだんの会話の中で、可能の意の表現として、aの言い方（「レル」、可能動詞）を用いるか、bの言い方（「られる」、「れる」）を用いるかを問い、次の要領で回答させる。

- A aのみを用いる $\begin{cases} \textcircled{a} \\ b \end{cases}$
- B ともに用いるがaのほうをよく用いる $\begin{cases} a \\ v \\ b \end{cases}$
- C a・bともに同程度に用いる $\begin{cases} a \\ || \\ b \end{cases}$
- D ともに用いるがbのほうをよく用いる $\begin{cases} a \\ \wedge \\ b \end{cases}$
- E bのみを用いる $\begin{cases} a \\ \textcircled{b} \end{cases}$

3. 調査結果

調査結果は表1の通りである。まず一段動詞の状況からみる。

〔表1〕 ※「意味」の欄は当該文脈が能力、受容、許容のいずれに当るかを、「肯定・否定」は否定の助動詞「ない」がつか（否）、否か（肯）を示す。

文例番号	動詞	意味	肯定 否定	A	B	C	D	E
1	泳ぐ	能	肯	188	2	0	0	0
2	着る	受	否	53	47	42	23	25
3	走る	許	否	176	12	1	1	0
4	寝る	能	肯	31	31	49	37	42
5	読む	受	否	182	7	1	0	0
6	降りる	能	否	46	30	46	27	41
7	見る	許	否	65	30	32	33	30
8	話す	能	否	185	4	1	0	0
9	出る	能	否	27	26	44	46	47
10	食べる	許	否	21	23	44	46	56
11	投げる	能	肯	16	11	30	56	77
12	行く	能	肯	105	44	24	10	7
13	のせる	能	肯	9	6	11	45	119
14	帰る	能	否	172	17	1	0	0
15	かける	能	肯	14	16	20	46	94
16	ける	能	肯	144	21	6	10	9
17	入れる	許	否	6	1	3	11	169
18	吸う	能	肯	180	8	1	0	1
19	寝る	受	肯	28	17	43	45	57
20	走る	受	否	167	15	5	2	1
21	降りる	許	否	43	33	40	31	43

22	話す	能	肯	186	4	0	0	0
23	着る	能	否	38	41	53	28	30
24	読む	能	否	186	3	0	0	1
25	見る	能	否	69	41	34	20	26
26	食べる	受	否	37	19	44	35	55
27	泳ぐ	許	肯	185	4	1	0	0
28	出る	許	否	37	22	46	42	43
29	のせる	受	肯	10	8	14	52	106
30	帰る	許	否	170	16	2	1	1
31	入れる	受	否	6	1	5	15	163
32	吸う	許	肯	186	3	1	0	0
33	かける	受	肯	18	8	30	50	84
34	走る	能	否	178	11	1	0	0
35	寝る	許	肯	34	14	54	44	44
36	投げる	許	肯	21	16	32	54	67
37	話す	許	否	184	4	1	0	1
38	降りる	能	肯	23	18	37	56	56
39	読む	許	否	179	9	2	0	0
40	着る	許	否	73	34	25	23	35
41	泳ぐ	受	肯	179	10	1	0	0
42	食べる	能	否	25	25	39	46	55
43	入れる	能	否	3	2	4	21	160
44	のせる	能	肯	7	5	15	49	114

【表2】 ※語幹0は語幹語尾の別のない語。

順位	文例番号	動詞	語幹	活用	意味	肯定否定
1	25	見る	0	上一	能	否
2	40	着る	0	上一	許	否
3	2	着る	0	上一	受	否
4	7	見る	0	上一	許	否
5	23	着る	0	上一	能	否
6	6	降りる	1	上一	能	否
7	21	降りる	1	上一	許	否
8	4	寝る	0	下一	能	肯
9	28	出る	0	下一	許	否
10	35	寝る	0	下一	許	肯
11	26	食べる	1	下一	受	否
12	9	出る	0	下一	能	否
13	42	食べる	1	下一	能	否
14	10	食べる	1	下一	許	否
14	38	降りる	1	上一	能	肯
16	19	寝る	0	下一	受	肯
17	36	投げる	1	下一	許	肯
18	11	投げる	1	下一	能	肯
19	33	かける	1	下一	受	肯
20	15	かける	1	下一	能	肯
21	29	のせる	1	下一	受	肯
22	44	のせる	1	下一	能	肯
23	13	のせる	1	下一	能	肯
24	43	入れる	1	下一	能	否
25	31	入れる	1	下一	受	否
26	17	入れる	1	下一	許	否

3.1. 一段動詞の状況

前述の岡崎氏の集計方法ののっとりレル型の用いられやすさを描いてみると、

- Aの場合のみで全回答者数の過半数95を越えるもの……なし
- A+Bの場合で同じく95を越えるもの……25 (110), 40 (107), 2 (100), 7 (95)
- A+B+Cの場合で同じく95を越えるもの……23(132), 6(122), 21(116), 4(111), 28(105), 35(102), 26(100), 9(97)
- A+B+C+Dの場合で同じく95を越えるもの……42(135), 10(134), 38(134), 19(133), 36(123), 11(113), 33(106), 15(96)
- A+B+C+Dの場合でも95を越えないもの……上記以外のすべて

となり、レル型の用いられやすい語の順位は表2のようになる。

さて、可能表現としての表現上の差に即して各語についてみると、結論的にいえば、能力、受容、許容といった文脈の意味の差によるレル型の用いられやすさは認められなかった。各語の意味面の順位は次の通りである。

- 「見る」 能(25)>許(7)
- 「着る」 許(40)>受(2)>能(23)
- 「降りる」 能(6)>許(21)>能(38)
- 「寝る」 能(4)>許(35)>受(19)
- 「出る」 許(28)>能(9)
- 「食べる」 受(26)>能(42)>許(10)
- 「投げる」 許(36)>能(11)
- 「かける」 受(33)>能(15)
- 「のせる」 受(29)>能(44)>能(13)
- 「入れる」 能(43)>受(31)>許(17)

能力が受容もしくは許容を下回るものが「着る、出る、食べる、投げる、かける、のせる」であり、半数以上の語に現われ、かつ、能力が受容、許容を上回るものであってもその数値差は僅少であり、有意な差と認められるほどの結果にはなっていない。したがって、調査で目論んだ、レル型への移行の際に意味的な差が内在した傾向として認められないかという視点は見事にはずれたことになる。が、消極的な結論になったとはいえ、東京語におけるられる型からレル型への移行に関しては意味的な面は関与しない、という点はおさえ

られたと考える。このことより、られる型とレル型の関係は、意味領域を分担しあった可能性のある四段動詞におけるれる型と可能動詞の違いとは異なり（前述の通り方言によっては分担しあっているところがある）、単なる接続の形式の取り替え現象として考えられるべきことがわかる。レル型形式、例えば「起きれる」などを「可能動詞」と呼ぼうとする意見もみられるが（注6）、歴史的発生過程においてこれは「読める」などとは基本的に性格が異なり、可能動詞の名で呼ぶべきものではないと考える。この点については稿を改めて論ずるつもりである。

この調査より得られた事実を二、三補足しておく。岡崎氏前掲論文で指摘された、二音節上一段に属する語（例えば「見る」）が最もレル型が用いられやすく、これにカ変（「来る」）、下一段（「寝る」）、三音節上一段（「起きる」）、下一段（「食べる」）の順で続くという傾向が今回の調査でも確認された。各語の用いられ方の平均を出し、先の手順で示すと表3のようになる。「降りる」と「出る、寝る」の順位が逆転しているが、それらの数値差は僅かであり偶然性によるものと思われ、岡崎氏の指摘をくつがえすものではない。

〔表3〕

文 番 号	動 詞	A	A+B	A+B +C	A+B+ C+D
7.25	見 る	67	102.5	135.5	163
2.23.40	着 る	54.7	95.3	134.7	163.3
6.21.38	降 りる	37.3	64.3	105.3	143.3
9.28.	出 る	32	56	101	145
4.19.35	寝 る	31	51.7	100.3	142.3
10.26.42	食 べる	27.7	50	92.3	134.7
11.36.	投 げる	18.5	32	63	118
15.33.	か ける	16	28	53	101
13.29.44	の せる	8.7	15	28.3	77
17.31.43	入 れる	5	6.3	10.3	26

肯定形と否定形の差（注7）が反映するか否かについても興味のあるところだが、今調査では文の意味を一定させ、肯・否を対照させたのが「降りる」一語だけだったので考察にまでは至らない。ただ、「降りる」の結果は否定形の方がレル型が用いられやすくなっている（文例6と38参照）。また、同じ二音節下一段語の「寝る」と「出る」をみると、岡崎氏の結果では否定形である「寝る」が肯定形の「出る」より上位に、逆に筆者の調査では否定形にした「出る」の方が肯定形の「寝る」より上位に、同様のことが同じ三音節下一段語の「食べる」と「投げる」でもいえ、岡崎氏とともに肯定形ながら「投げる」が「食べる」の上位に

あったのが、筆者では否定形「食べる」が肯定形「投げる」の上位に立った。このことより、否定形の方が肯定形よりレル形が用いられやすいかという予想もたてられる。が、今のところ資料が十分ではなく、今後の課題としたい。

3.2. 四段動詞の状況

四段動詞の状況をA、つまり可能動詞だけを用いるという回答を中心に示すと表4のようになる。意味的側面の関わりについていえば、Aの、全体の中で占める割合でみると、「吸う」を除き、能力が受容、許容より高くなっている。が、いずれも有効な数値とは認めがたい。予想はついていたが四段動詞についても意味上の違いは可能動詞化に関して共時的には認められないことになる。

〔表4〕

文例 番号	動 詞	意 味	A	$\frac{A}{190} \times 100$ (%)	平均 $\frac{A}{190} \times 100$ (%)
22	話 す	能	186	97.9	97.4
8		能	185	97.4	
37		許	184	96.8	
1	泳 ぐ	能	188	98.9	96.8
41		受	179	94.2	
27		許	185	97.4	
18	吸 う	能	180	94.7	96.3
32		許	186	97.9	
24	読 む	能	186	97.9	96.0
5		受	182	95.8	
39		許	179	94.2	
34	走 る	能	178	93.7	91.4
20		受	167	87.9	
3		許	176	92.6	
14	帰 る	能	172	90.5	90.0
30		受	170	89.5	
16	蹴 る	能	144	75.8	75.8
12	行 く	能	105	55.3	55.3

さて、表4より可能動詞化の徹底が知られるのだが、「走る」「帰る」が「話す、泳ぐ、吸う、読む」に比べ若干可能動詞だけを用いる率が低くなっている。さらに「蹴る」では低くなり、「行く」では可能動詞専用は約半数だけとなる。「蹴る、行く」ではD、Eの回答、つまりれる型の方をより多く用いる、れる型だけを用いるという回答が約10%を占めた。これらより、四段動詞においても音環境の違いがわずかながら働いていることが指摘できよう。即ち、

……CiCu 二拍「行く」、三拍「走る」
 ……CeCu 二拍「蹴る」、三拍「帰る」

の環境にあるものが、… CaCu(「話す」)、… CoCu(「泳ぐ、読む」)、… CuCu(「吸う」)よりもれる型を残しやすいという傾向である。終止形だけをとれば、CiCuは上一段、CeCuは下一段と同じ音環境である。「蹴る」は所属活用型に問題のある語だが一応四段活用型としてとらえるならば、一段動詞において二音節上一段、下一段、三音節上一段、下一段の順がレル型の用いられやすさにあつたと同様、二音節上一段のCiCu、二音節下一段的CeCu、三音節CiCu、CeCuの順でれる型を残しやすいという傾向が認められよう。この理由はCiCu、CeCuに「れる」のついた形が一段動詞「られる」のついた形と類似していることによるものだろうか。

CiCareru(ikareru) CeCareru(kerareru)

Cirareru(mirareru) Cerareru(nerareru)

この点についても今後の検討を要する。

おわりに

ある表現枠の中で既存の形式に新たな形式が出現してきた際に、その間にどのような言語戦争が起こり、どのような終結をみせるか、言語はあらゆる場面で分裂、統合をくりかえし展開していくわけだが、可能表現に関しても、既存の「れる、られる」と可能動詞、レル型という新形式がぶつかりあい、現段階では四段動詞においては可能動詞が「れる」を凌駕し、一段動詞でも懸命な規範意識による制限にもかかわらずレル型が優位に立ちつつある。この一連の展開に際し、表現枠の中で、表現枠を分割し互いが併存しあう方向をとるか、否か、これが今回の検証の目的であった。結果は可能動詞、レル型の一方的攻勢で、表現枠を分担し対峙する線はみられないまま終結に至ろうとしている。今回の試みはいわば成果のない検証に終わったが、言語の変遷をみる上で試みておかなければならない無駄な一歩とも考え、あえて公にした。大方のご叱正を乞う次第である。

(注1) 坂梨隆三氏「いわゆる可能動詞の成立について」(『国語と国文学』昭44. 11)など。

(注2) 霽岡昭夫氏「江戸語・東京語における可能表現の変遷について」(『言語と文芸』54号昭42. 9)、神田寿美子氏「現代東京語の可能表現について」(『日本文学』16号昭36. 3)など。

(注3) 日野資純氏「青森方言管見」(『国語学』34昭33. 9)

(注4) 引用は第4版に拠った。

(注5) 調査の信憑性をはかるために全くの同一文を離れた位置で重複させた。調査文例13, 44「のせる」である。ほぼ近接した結果を得ており、これより、面接によるものではなかったが、信頼に足る調査法になっているものと考ええる。

(注6) 渡辺実氏「『行ける』『見れる』——口語における助動詞複合の問題——」(『月刊文法』昭44. 6月号)、鈴木丹士郎氏「可能動詞」(『国語史辞典』所収 昭54. 9)など。

(注7) 便宜的に、否定の助動詞「ない」がついた形を否定形、それ以外を肯定形としておく。

〔付記〕

都立深沢高校の調査では浅子逸男先生に全面的にご協力いただいた。また、この小報告の骨子は都立大本ゼミで発表の機会を得、中本先生はじめゼミ参加諸氏より貴重な意見を賜った。記して感謝の意を表します。

東京都立大学助手